

IoTステップアップ事業実績報告書

**A I － O C R読取り機能付スキャナ導入による
作業時間削減**

1 会社概要

事務所名	税理士法人ツチダ会計	
代表者名	土田 茂博	
所在地	【本店】 〒945-0035 新潟県柏崎市北半田2丁目16番15号 TEL：0257-22-5977 FAX：0257-22-5996 【新潟事務所】 〒950-0911 新潟県新潟市中央区笹口2丁目10-13-202 TEL：025-250-5088 FAX：025-250-5089	
業務内容	•月次巡回監査、会計指導・相談 - K 経営計画のお手伝い - F OA財務の支援 - S 書面添付、電子申告の推進 •生命保険、損害保険指導業務 •事業承継・相続税対策 •創業・経営革新の支援 •医療機関、社会福祉法人、公益法人、NPO法人の運営・経営の相談 •社会保険・労働保険の相談 •就業規則・各種諸規定作成の指導・建設業の許認可 など	

2 事業の目的・背景

- ・ 税理士事務所として関与先の経理・会計・税務申告業務を行うにあたり、税制改革の大きな転換点の中、仕訳について多くの注意点及び確認点があり従来よりも時間を要するようになった。

① インボイス制度

- ・ 登録事業者の有無、記載内容の確認
- ・ 登録事業者番号の入力
- ・ 免税事業者の経過措置 他

② 軽減税率

- ・ 8%、10%の確認及び振り分け
- ・ 軽減税率対象の確認 他

当事務所としては、関与先様自身でシステム利用により仕訳入力をしてもらい、現場に訪問し確認・経営指導に時間をかけたい。

3 事業の概要・詳細

- 関与先様自身でシステム利用により仕訳入力（自計）を基本としているが、事業者の規模や人員不足・年齢的な面で記帳代行先が多く、事務所内での入力業務に時間がかかっている状況。
- 「JDL AI - OCR読取りスキャナ」の導入により、領収書や通帳コピー等の証憑をスキャナ読取りで同時に仕訳を生成。
人の手で一件一件仕訳を打ち込んでいた時間が大幅に削減される。
毎月発生する定例仕訳や一度計上した仕訳についてはAIが自動判別、預金の動きやカード明細書などと重複する日付や金額については注意喚起を促すなど、AIによるチェック機能も備わっており、人的ミスを事前防止できる。
- 削減した業務時間については、関与先様へ経営アドバイスや税制や保険指導に充て付加価値を高める。

4 事業進捗と課題

- DX推進委員会
選任を置き、年間及び月間計画の中で進捗管理する。
- システム研修
社員・パート全員での操作方法研修により、誰もが利用できる体制作り。
- 利用先の選定
業種や書類整理状況により利用先を選定。
及び、利用促進の為の書類整備を指導。
- 利用状況及び削減時間、問題点の洗い出し
利用先毎に削減時間、感想・問題点を抽出。
操作方法の裏技など共有。システムの問題点については、JDLに報告。
問題点・改善点については、Teamsにて全員共有。



5 事業の効果

【仮定】

- 従来の入力時間 1 仕訳 3 0 秒の場合、 2 5 0 仕訳 1 2 5 分
- AI - OCR読取り 2 5 0 仕訳 2 分

【成果】

- 月次先：概ね 1 か月 3 0 分～ 1 時間削減
- 年次先： 3 0 分～ 1 時間削減
- 年一先： 3 ～ 1 2 時間削減
- 確定申告：医療費領収書読取り（読取りのみであれば 1 分で約200枚）

【効果・問題点】一例として・・・

- レシート分の入力時間が削減。軽油税も読み取ってくれ手間がなくなった。
- 事前の通帳の読取により、訪問日前に事前確認を行なっている。
- A I に覚えさせれば担当者以外でも処理ができる。→パートさん大活躍
- ▼ 通帳読取で時短となったが、毎月新たな入金先や支払先等が発生するため、その都度エラーが起こるのが煩わしい。（エラー時の仮の退避勘定が欲しい）
- ▼ 領収書返却後の保管状況が確認出来ない。

6 今後の見通し

- 事務所方針としては、関与先様より入力して頂く【自計】を基本としているが、諸事情により「記帳代行」を継続していく先には、より積極的かつ計画的に活用する。
 - 利用先について、「出来る先」がメインで担当者単位でバラツキがあった
 - ・利用できる証憑書類が少ない
 - ・慣れている入力の方が早い(初期登録が面倒)
 - ・今までの記帳指導(日記帳活用)からの逆行への抵抗感 など
- 個人 所得税確定申告 事業所得先の利用
及び「医療費領収書」集計の継続利用
 - 導入に大きな成果あり
 - ・個人別、医療機関別集計が可能
 - ・領収書と通知書との重複チェック機能あり
 - ・操作研修により主に内勤者が利用できた

※導入により時間削減は一定の効果があつた。

半面、AI読取りはまだ発展途上の面もある為、システム利用はあくまでも経過であり、結果には“人の目”での確認が必須であつた。